

地域を越えた歴史文化の視点

## 32. 江戸時代の赤穂を歩く－『播州赤穂郡志』の世界

### 【ストーリー】

享保12(1727)年、藤江熊陽(忠廉)によって記された『播州赤穂郡志』は、旧赤穂郡(赤穂市、相生市、上郡町)における、主に中世以降の歴史を記した地誌である。

テーマは、赤穂郡の庄郷、領主、城郭、町割・諸村、川筋、道筋、古城、古跡・古人、神社、仏閣、土産、風俗に分かれており、昔の村、城や城下町の様子、地形、当時の神社仏閣などが、どのような姿であったのか、詳細に記されている。

約300年前に書かれた「現在」の記録。そこに記載されたものの多くが、現在も残されていることに気づく。

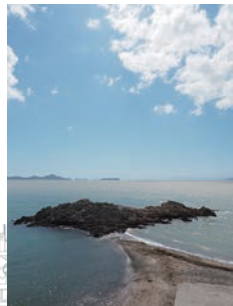
たとえ、区画整理やほ場整備が行われた場所であっても、旧街道の多くは変わりなく見ることができる。また社寺をはじめ、地名等にいたっては、その多くが残されており、300年前と変わらぬ風景、景観、社寺、地名が多く残っていることを教えてくれる。



百目堤跡



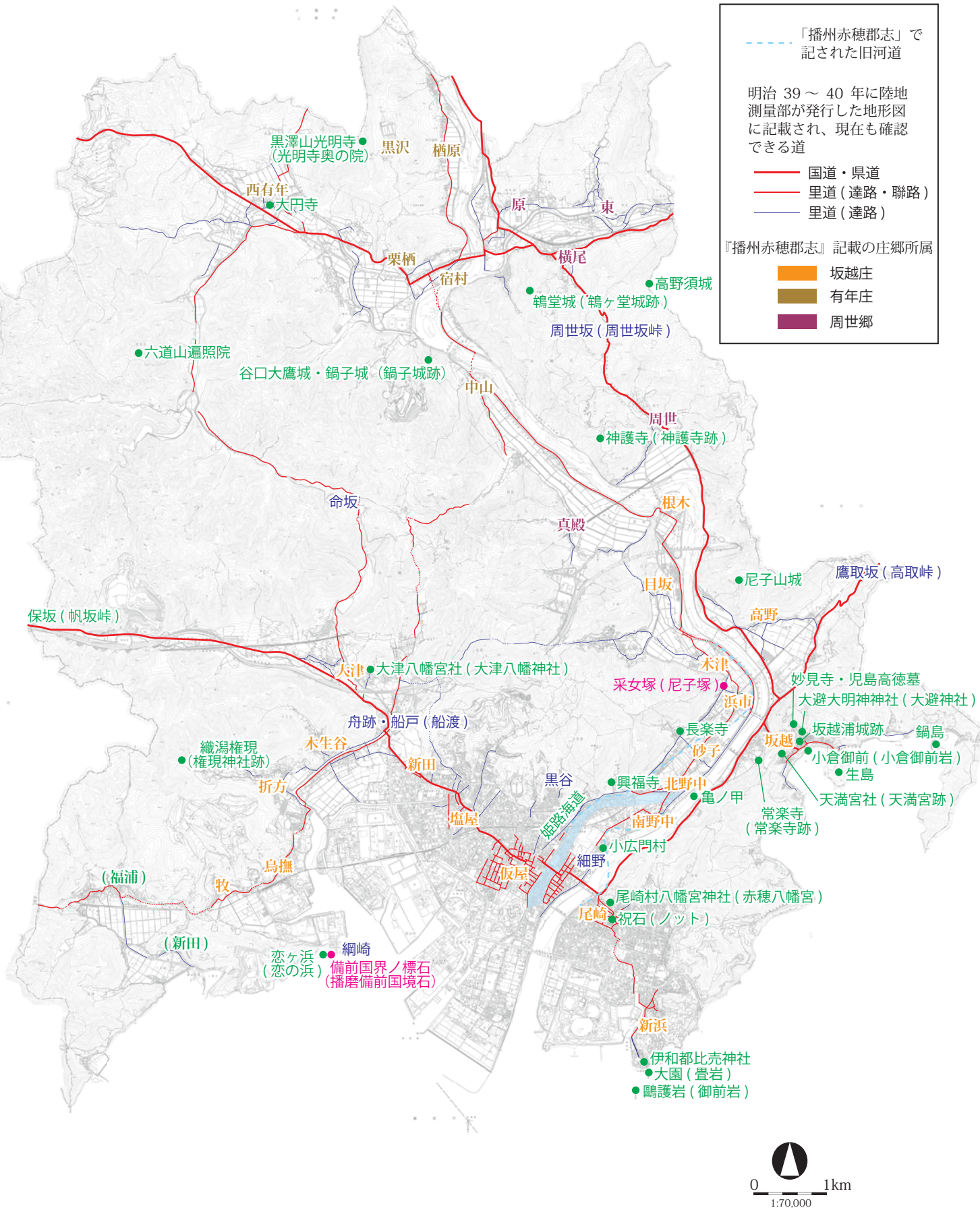
播磨備前国境石



畳岩(大園)







項目名は藤江熊陽 1727『播州赤穂郡志』に記載の名称。( ) 内は現在の名称。

凡例 ●もの ●場 ●こと